

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	新名 愛梨
論文担当者	主 査 岸本 裕充
	副 査 都築 建三
	副 査 戴 毅
学位論文名	Combined Meniscal Saucerization and Repair Versus Subtotal Meniscectomy for Symptomatic Discoid Lateral Meniscal Tears in
	Children and Adolescents
	(若年者の症候性外側円板状半月板損傷に対する亜全切除術と
	形成縫合術の術後成績)
論文審査の結果の要旨 外側円板状半月板(DLM)は半月板の先天的な形態異常で、その形態学的・構造的特性により脆弱で損傷しやすく、疼痛、クリック音、伸展制限などの半月板症状を高頻度で生じる。保存的加療に抵抗する症候性DLM 損傷に対する手術として、従来行われていた亜全切除術(SM)は術後の関節症性変化の進行や離断性骨軟骨炎(OCD)の発生などが問題となるため、現在では半月板を可及的に温存する形成縫合術(SR)が主流となっている。しかしSM と比べてSR がどの程度の利点を有するかは未だ明らかではない。そこで、若年者のDLM 損傷に対して施行したSM とSR の術後成績を比較検討された。 対象は2005年から2018年に症候性DLM 損傷に対して手術した18歳以下の症例のうち、2年以上観察可能であった41例49膝。申請者らは術前、術後2年時のLysholm knee scoreを臨床評価として用い、放射線学的評価で膝単純X線を撮像し、Rosenberg viewでTapper and Hoover classificationを評価し、さらに外側関節裂隙幅(LJSW)を計測した。また半月板手術後に生じたOCDに対する外科的治療の有無を評価した。SM群は20例22膝、平均11.9±3.4歳、SR群は21例27膝、平均12.2±2.8歳であった。術前の平均Lysholm knee scoreはSM群79.1±6.8、SR群76.0±7.3、術後はSM群93.3±4.2、SR群96.5±4.0で両群とも改善を認め(P<.001)、SR群で有意に高値だった(P=.036)。Tapper and Hoover classificationの評価では、SM群の9%、SR群の7%で術後に2 grade以上の進行が観察されたが、両群間に有意差は認めなかった。術後LJSWは術前LJSWと比較して両群で有意に狭小化を認めたが(P<.001)、群間での有意差はなかった。術後OCD発生率はSM群が6/22例(27%)、SR群が1/27例(3%)で、2群間に有意差を認めた(P=.036)。SR群で生じた術後OCDは保存加療で治癒したが、SM群で生じた術後OCDは全て外科的治療を要した。SR群は、SM群と同様に術後の外側関節裂隙の狭小化を認めたが、臨床成績や術後OCDの発生やその後の追加手術が少ないことから、SM群よりも半月板機能を温存可能な治療方法であることが示唆された。 本研究では、症候性外側円板状半月板損傷に対する形成縫合術に関する重要な知見が得られており、学位授与に値するものと判断した。	